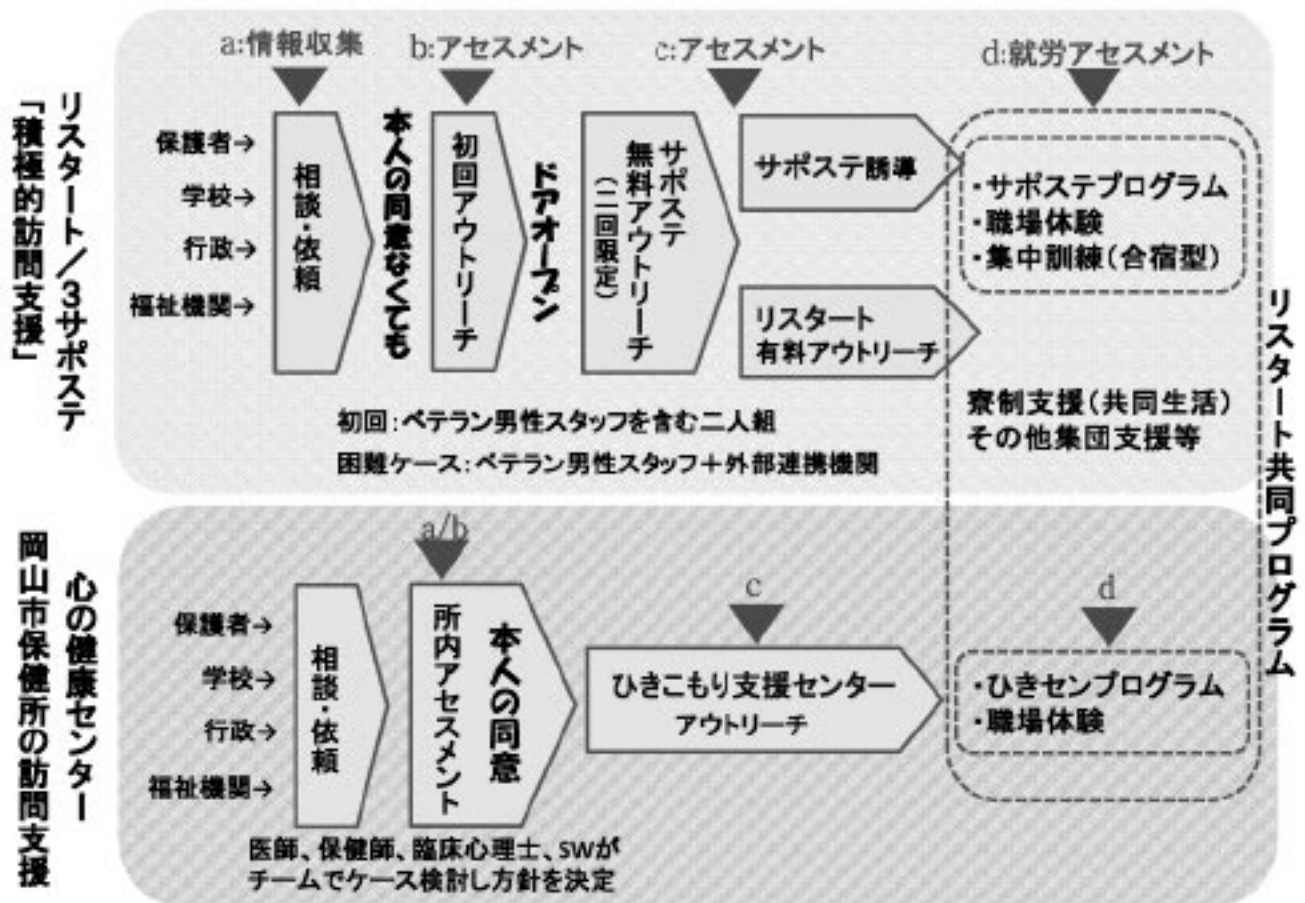


図-2 二つのアウトリーチの流れとアセスメント



①アウトリーチの流れとアセスメント

- a: 事前情報収集 (家族、学校等)** 相談者の8割が母親。確認事項: 最近の本人の様子、パニックが起きないか、訪問によい時間帯、帰った後親に危害を与えないか等
 必要に応じて連携機関と連絡調整(保健所、病院、警察等)。
- b: 初回訪問** 二人で訪問(一人はベテラン男性)。確認事項: 家の周辺1~2km圏でコンビニ、ゲームショップ等本人が立ち寄りそうな場所。家の周り、車、バイク、自転車等の使用状況。二階の窓・カーテン等(見られている)、逃走経路、玄関まわり。屋内の普段いるところ。
本人の気持ち:「自分のために誰かが来た」、「怖さ」、「やっと来てくれた」
 会えなくても接触の効果あり(ドアの前で声掛け、メッセージ残す)。
 接触できるまで多様な方法を試す。支援員とのマッチング、きっかけを注意深く見る。
- b~c: 本人の居場所で** 確認事項: 部屋に入れたらさりげなく内部を観察(本、ゲーム、CD、ポスター、ゴミ等) 興味関心、生活の様子、食事のとり方、精神状態の把握。
 初回はあいさつ程度(名刺、チラシ)でよい。後で親に反応を聞いてみる。
- c: サポステ誘導** サポステ無料訪問の場合は、二回目でサポステに誘導を図る。
 本人の困り感(何とかしたいがどうしたらいいかわからない)に寄り添う。
 確認事項: コミュニケーション、未所能力(体力、気力、健康度)、交通の便。サポステのプログラムに関心を示すかどうか。
- d: 支援施設で** サポステやひきこもり支援センターでの相談、プログラムを通じてアセスメント
 職場体験、集中訓練などを通じて生活能力、職業能力のアセスメント ⇒ 目標設定

アウトリーチは同行二人: 生活に密着する、寄り添って訓練を行う、一緒に行動する

②アウトリーチ後の自立支援の在り方

その1. 若年無業者等 集中訓練プログラム事業

～ 山陽ハイツにおける合宿型集中訓練一ヶ月の変化 ～

・続けられるだろうかという不安
・帰りたい気持ち強かった
・朝起きるのが辛い
・共同生活・人間関係が辛い
・意見がちがうとき悩んだ



・やりとげられた。できるようになるかも。
・このくらいのことはできるんだという発見
・規則正しい生活ができた
・人の話が聞けるようになった
・一歩前に進めた、来てよかった



開始3日目の講座「目標設定」

合宿棟の共同スペース

訓練内容は館内・客室清掃、窓ふき、床の張り替えなど



企業研修が多く稼働率の高い施設



フロント、ラウンジ等オープンスペースの清掃、窓ふき



客室の清掃（当日は中学生の職場体験が行われていた）



廊下カーペットの張り替え
（共同作業）

その2. 寮制支援事業

何らかの形で就労できた人や就労予定がある人に対し、より一層の自活能力を身につけることを目的に寮制支援を実施。

民間の戸建住宅を賃貸し、利用者だけで共同生活、スタッフが建物管理。現在男性寮3軒、女性寮1軒が市内に点在。定員3名/軒。

見学先の寮(右写真)では、利用者はアルバイトや通信制高校に出ており留守だったが、空き室で不登校児の学習支援を行っていた。寮生の一人はバイトで大型TV、PCそして最近では車を購入し、実家に挨拶に行った。



その3. 就労継続支援・ジョブコーチ

～「心の健康センター」の自立支援部門「ひきこもり支援センター」～
ひきこもりから出てこられるようになった人たちがステップアップできるようサポートする

Step1：社会参加の応援、安心できる居場所づくり

Step2：就労意欲がでたら受入協力企業での職場体験から就労へ移行

Step3：ジョブコーチとして継続就労をサポート



職場訪問：資源ゴミリサイクル業

Y君(38歳)は働き始めて10日。中学から不登校、ひきこもり歴20年。親が心の健康センターに相談。就労の意思あり、職場体験の後、フルタイムで働き始める。継続が第一の目標と本人と事業所に理解してもらっている。周囲のサポートを受けながら作業に取り組んでいた。

③ピアスタッフの育成と活用

■ リスタートにおけるピアスタッフの活躍

不登校やひきこもり経験者、発達障害の子を持つ母親など。
緊急雇用対策事業を活用しスタッフとしてを採用予雇用。新たに三名の利用者定。
「声をかけられることはものすごいチャンス、すごくありがたいと思う」(ピアスタッフAさん)

■ ピアスタッフによる支援の良さと課題 (スタッフの自己分析)

- ・引きこもりの経験が支援対象者との距離を縮めることに有効に働く
- ・対象者と家族の理解が深まるように、家族に対しても経験を通じた意見を伝えられる
- ・支援対象者へ感情移入してしまい、必要な助言等がしにくい場面がある
- ・ベテラン支援員に2回同行、次から独り立ち。自分で考えてやっていくしかないが...

■ 積極的訪問支援ではピアスタッフの強みを発揮しやすい (侵襲性を感じない、共通点が多く話しやすい、身近なモデルになる)

相手が望んでいないところに入って行くので、積極的に自分のことを話して自分を知ってもらう

人間不信からひきこもりになったAさん: 今も人間関係を急にリセットしたくなる。しみついている。
一般社会には警戒心があり、なくなるとは思えない。自分は運がよかっただけ。
だから出会いが大切。一本の電話を相手にかけることの重みを感じている。

他者を支援する仕事を通じ自分に向き合い、社会とのつながりを回復していく
※支援員に求められることはセルフコントロール、覚悟、受容、依存させない支援 (代表)

研修生②⑦
特定非営利活動法人 リスタート

アウトリーチ実地研修の学び

NPO法人 ふらっとコミュニティ

